

第281回くらしの植物苑観察会 令和4年8月27日(土)

## 「続・外国人がみた変化朝顔」

仁田坂 英二 (九州大学大学院理学研究院 生物学科 准教授)

アサガオ(*Ipomoea nil*)は中央アメリカ原産の植物であり、人類が薬用に用いるために世界中に広まったと考えられているが、日本だけで多様な品種分化を遂げ、観賞用の園芸植物として発達した。江戸期の多色刷りの図譜をはじめとする、ほとんどの文献資料は日本にあるが、江戸から明治にかけて日本を訪れた外国人が当時のアサガオに触れた文献も存在する。これらから、日本の情報だけでは知り得なかった情報や、外国人のアサガオやアサガオブームについての考えを知ることができ非常に興味深い。

シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796年-1866年) ドイツの医師・博物学者

シーボルト日記(2005) 石山禎一、牧幸一訳、八坂書房、東京より引用。

「1861年2月12日(火曜日): アサガオの種子は、瀉下剤に使われ、中心部から細かい白い粉が作られる。この粉は洗い粉(Araiko)と呼ばれている。薄い皮があり、その中身を乾燥させた粉は、化粧品である白粉として愛用されている。周知のごとく、日本には花や葉の色や形の異なる無数のアサガオ属の園芸品種があり、これらにはよく金や銀色の斑点がついている。このような変種は成熟した種子を強い陽に晒すことによって得られるらしい。地上の若い木質部分が霜害にあうと(そこから出た)若枝は高い変種が生ずることを、私は以前他の箇所でも述べた。」

「6月21日(金曜日): 種子を強い陽に晒すことによって、アサガオの葉に斑が入る。また、花の色を変えるためにアサガオに酢をかける。そのようにして出来た種子も、同じような色の花になる。そして人々は、ただ単に普通の漏斗状のアサガオよりも、大輪のものや切れ込みの入ったものを珍重する。したがって花冠は深い裂片状になる。またその栽培された種子からは、同様の花が得られる。」

アサガオの種子が白粉として用いられていたのはほとんど知られていない。成熟した種子を強い陽に晒すと金色や銀色の斑点がつく、酢で花色を変えると遺伝する等、非科学的な事柄も信じられていたようである。

津田 梅子(つだ うめこ)元治元年(1864年)~昭和4年(1929年)日本の教育者

The Attic Letters - Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother. (1991) Edited by Y. Furuki et al., Weatherhill, Inc. pp.160-161.より引用。

「1884年10月7日(明治17年): アサガオの結果が悪かったのは残念ですが、日本ではどの種が変化して、どの種が普通のアサガオになるのかははっきりしません。今年変わった形をしていなくても、来年は変わった形になるかもしれませんので、この(普通のアサガオから)種を取って、また植えてみてください。普通は7粒のうち1粒だけが特異な形をしていて、あとはすべて普通の形をしています。この後者の種を植えてその種を取ると、その後の植物に再び特異な形、つまり出物が現れるのです。もしこれが本当なら、ぜひ試してみてください。日本ではそう言われていますが、とても不思議な主張なので、本当なのか私にはわかりません。」

1984年に津田塾大の屋根裏部屋から発見された、アメリカ滞在時の養母であったランマン夫人と1882-1911年にかけてやりとりした手紙の記録。その中に変化朝顔に関するものが見つかった(筑波大学 澤村京一先生から

の情報)。変化朝顔の種子をランマン夫人に送った経緯は不明だが、農学者である父親の津田仙は江戸期の朝顔図譜の版木を買い取り、再版するなど変化朝顔にも造詣が深かった。

劣性(潜性)変異体である出物の分離比はメンデルの遺伝法則に従っているが、当時の栽培家がこの分離比について言及した日本の文献は明治35年(1902)、正確な分離比については明治45年(1912)まで出てこない。現在では、株別に採種し、出物が出る親木の種子だけを残して維持している。そのため、播いた種子の1/4が出物となる。しかし、弱い出物は発芽にしばしば失敗するし、株別に採種せず、親木の種子を混ぜた場合、出物の出現率は低下する。そのため、この7粒に1粒が出物になるという記述は当時の栽培家の感覚に近いように思われる。

**エリザ・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore, 1856-1928) アメリカの作家・写真家・地理学者**

Eliza R. Scidmore (1897) The Wonderful Morning-Glories of Japan, The Century Magazine, December 1897, pp. 281-289 より引用。

シドモアが日本に最初に訪れたのは1884年ごろで、人力車も駆使し日本の文化について精力的に取材を行っている。変化朝顔の素晴らしさにも触れ、当時の著名な栽培家に取材を行っており、これらをまとめ、1897年センチュリー誌に記事を掲載した。変化朝顔の品種の分類や由来、挿絵も掲載されており、当時のアサガオについての日本人の栽培家の考え方も知ることができる。また、第三次ブーム早期に結成された朝顔会の一つである穠久会の会報(穠久会雑誌1号;明治33年=1900)には戸波虎次郎氏による全文の邦訳が掲載されている。

「アサガオの栽培は、宝くじのようである。丁寧に集めてラベルを貼った owa(大輪咲き)の種16粒のうち、必ず親花が咲くのは2~3粒である。1粒10セントから1.2ドルで売られている fukurin(複弁花)の種は、わずか50%しか育たず、100粒のうち5粒しか複弁花が育たないと言われている。」

文中に owa と fukurin という用語が頻繁に出てくるが、穠久会の記事ではそれぞれ、大輪、複弁花と訳している。文化文政期の図譜の読み仮名や現在では、大輪朝顔のことは、「たいりん」または「だいらん」朝顔と呼ばれているが、当時「おおわ」と発音していたのだろうか。また fukurin は覆輪という花の模様のことではなく、複弁(牡丹咲のこと)の読みをシドモアが混乱したのであろう。複弁花(出物)は100粒に5粒しか生じないという認識だったようだ。これは標準的な2性出物の1/16に近いと言えるかもしれない。

横山茶来(萬花園)がシドモアに、アサガオの種類は大きく二つに分けられ、一つは大輪咲き、もう一つは複弁花であると説明している。前者は一般向けで植木屋が育てるもの、後者は好事家が育てるもので、同じアサガオでも全く異なる種類だと認識されていた。そのため、大輪とは丸い花の一般向けのアサガオの総称で、複弁とは八重咲きも含めた変化朝顔の総称を意味しているようである。大阪の吉田宗兵衛へのインタビューでは、複弁花は更に、獅子、牡丹、雀(車咲)、孔雀の4つに大きく分けられると説明している。第三次ブームの途中で獅子咲、獅子咲牡丹、車咲牡丹、采咲牡丹の4ジャンルが確立するが、それ以前の変化朝顔の分類が見て取れる。

.....

**次回予告** 第282回くらしの植物苑観察会 令和4年9月24日(土)

「身近なシダ植物とその生態」 水野 大樹氏

(千葉県立中央博物館 企画調整課 副主査)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員30名